

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	途を行く : 創作
Author(s)	北野, 裕一郎
Citation	龍南, 226 : 7 - 36
Issue date	1933-11-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7143">http://hdl.handle.net/2298/7143</a>
Right	

# 途を行く

北野裕一郎

「児童には明朝お引き合せませう。」

「よろしく……………」

「今日は此で、明日から……………」

「では失禮します。」

俊二は校長室を後にした。

田の中の徑は細く續いた。

案外人の良きうな校長だつた。教員の中にも、虫の好かぬ様子をしたのが二三人はゐたが、十七八人もゐる中だし、又世の中にそんなに良い人ばかりゐる筈がない、大丈夫だらうと自分で思つて見た。それと同時に俊二は此の一月位の間に起つた彼と彼の周囲の大きな變化を次々に思ひ浮べてみるのだつた。

「チチキウベウカヘレ」と言ふ電報が來たのは、夏休みが終つて新しい學期が四五日始まつた日の夕方だつた。すると一時間も立たぬ中に暗い臭い寮の部屋に又電報が來た。

「チチキトクスグカヘレ」

あわてゝ歸つて來た時には、父は心臟麻痺で、もうこと切れてゐた。

汽車に揺られてゐる時は、もし父が死んで終つたら、自分は學校を止めて、母と二人で、働きながら暮して行かう。とヒロイツクな感情を起したり、そんな馬鹿なことがあるものか、と不安に怖えながら、否定して見たりしたが、父の死んで冷たくなつた顔に面と向ふと全てが消えて終ひ、後から後から涙が出て、前後の考がなくなるのだつた。母も只、泣くだけで、伯父が隣の町から來て葬儀萬端をやつてくれた。

父が生きてゐる間は、裕かな様に見えたが、父の死と共に、債權者が多數やつて來て、整理をして見ると、残つたものは彼と母と、借家が一軒丈けだつた。母と彼は借家にと建てゝあつた小さな家に移つた。二人しかゐないのだから充分である。

次に起つた問題は彼の學校のことだつた。人が良い丈けで金のない伯父にはとうてい頼めない彼は、自分から學校を退いた。母は涙を流したが、彼は自分が大きな事業を遂行した様な満足を感じて、母を慰めた。そして便を求めて、小學校の教員に使つて貰ふ様に頼んだ。運良く、此の秋盲腸で休んだ人の後へ入ることが出來て、今日は小學校に行つて皆の教員に會つて來たのだつた。とは云へ一週間程前から毎日授業參觀に行つてゐたので自分に出來ないことはないと自信は持

つてゐた。

「此で學校生活ともお別れだ。此の前までは教はつてゐた俺が、今度は教へるのだ。それにしても……………」

後は暗い感情に捉へられて、襟章のLをもぎ取ると地面に投げつけた。淋しい空虚な物足りなさが後からついて來た。L。文科のLではなし。LebezのLだ。俺は生活をもぎ取られたのだ。皆友人は進む可き道に進むだらう。俺獨り脇道にそれて終つた。いや。くだらぬ講義を聴くよりは自分で自分の生活を開いて行く方がずつと價值のあることだ、一生田舎の小學校の教員で終るのではあるまいし、と自分で慰めて行くと、直ぐ又、俺はこのまゝ朽ちて終ふに違ひない、一生田舎の教師で、他の人々はぐんぐん進むだらう。「田舎教師」として朽ち果てる人生。彼は急に引き返すと、又Lの襟章を拾ひ上げてポケットにしまひ込んだ。人にとられてはならないものゝ様に。

極度に達した自然は今靜かに凋落へと足を進める。白く薄い雲が眞綿の様にすうつと空の紺青に流れて、微風が稻の上をさわさわと波を立てゝ動いて行く。櫟や檜の葉がざあつと騒ぐ。野菊が白つぽい埃を蔽つて、土手に咲いてゐる。

彼は自分が今から迎える人生は凋落ではない。新しい生活への首途であると思ひたかつた。敗者となつてはならない。ヘル服には埃が一杯白くついてゐた。

夜が靜かに部屋に漂ひ始めると、彼は明日から教へる課目を一寸見た。出来るだけ解り易く、ゆつくり教へてやれ。

母は彼にこんな生活を始めさせるのを何度も嘆くのだつた。が彼にしてみれば、母がそんなに云へば云ふ程自分の行爲が犠牲心に充ちた英雄的なものに感じられるのだつた。

しらじらと、朝霧　　野山をこめて

月のごと日輪　　ほのかに浮ぶ。

野路を行く人影　　……………

小一里ある山あひの途だつた。俊二は第一目目の授業に行くのだ。今日教へねばならない讀本の新体詩の一節に似た朝だつた。立ち並ぶ雑木の隅々に霧が低く這ひ、木立の中はまだぼんやりして、森の梢の向ふで太陽が輝きかけてゐた。

朝は清澄な空氣に満ちてゐる。俊二の脚も軽い。新しい生活。良かれ悪しかれ、過去との間に大きな線を引き得た、新しい心と力が休一杯に湧いて來た。あゝも、かうも、と人間が生活するのには、その生活の中に小さい理想や希望を見出すのである。自分の生活をしてゐる満足感がひし／＼と身に感ぜられる。

新任の挨拶の後一時間目が始まつた。六十人程の男生徒の顔が好奇心に輝いてゐる。

「私が今日から、この級の受持です。私は皆と勉強させよう。良く教へることは出来ないが、一緒に勉強することは出来ると思ひます。私が君達に教へると同時に君達も私に教へて下さい。そしてお互に教へ合つて進みませう。皆判らぬことが在つたらどん／＼聞いて下さい。では前の先生の次から初めますよ。私が讀本を教へる順序は、第一に誰かに讀んでもらつてそれから、二番目に判らぬ字を皆が質問して、第三番目に私が讀んで、次に又皆の中の一人か二人に讀ませて、次に先生と皆とで譯を考へます。では松木君讀んで下さい。」

級長の松木はすらく／＼と新体詩を讀み上げた。

ガラス戸ぬらし

しめやかに、ひそかに、

夜の霧流る。

陽が西の空を區切る連丘に入らうと赤く燃えて森の中にはもう、夕靄がたゞすんでゐる。

途を辿るに連れて、朝は忘れてゐたが、彼の心には、退いて來た學校のことが、思ひ出すまいとすればする程意地悪くつきまとつて來るのだつた。友達、生活に何らの屈託のない姿。それが、新しく大きな成功と共に世の中に出て行く姿十人足らずの友人と作つてゐた同人雑誌のこと、もし、あの才のある前田の創作が東京の先輩に認められたら、敗者、敗者。自分が彼等に劣つて居るだらうか。才能では決して……。然し少くとも環境は……。がまだこの境遇を切り開けないと決定された理由ではない。生活を自己のものにして進み得る力が彼等にあらうか。

冷え冷えとした秋の風が、玉蜀黍の枯れた莖を騒がせて、夕闇の中に消えて行くのだつた。ひぐらしの聲も地にひそんで終ひ、がしや／＼とくさむらで虫がすだいてゐた。

母の前に出ると、胸の中の物をおさへつけて、朗かに振舞つて見た。後はつめたい感情に捉へられながらも。田舎教師の平凡な生活が外面から彼を一定の形の中に捉へてしまつてゐるが、彼の心の毎日同じ所を往來する不安は日に焦燥を増してゐた。

以前の友人からも時々手紙が來た。彼の親友だつた前田からは、何度も同人雑誌に、創作を發表する様にとすゝめて來た。そして俊二にとつては、前田から親切にくれ／＼ばれる程、次第に心がこぢれて、その言葉をすなほに受け入れることが出来なかつた。

秋はだん／＼深くなつて行く。空の色が次第に濃くなつて行く。

× × ×

秋が闊けて行く。

澄んだ夕空を、椋鳥の群が斜に飛んで行く。蝉がかすかに眞珠の玉をころばす様に、草かげで鳴いてゐる。自然のすべてが、哀れさを増して行つた。

いつの間にか俊二も代用教員の仕事に、持前の熱心さをもつて、慣れて行つた。児童教育、その中からそれ相應の興味を見出すのだつた。(児童の心身の調和的發達と完全なる社會的生活を營み得る人格を完成する……)(教育の目的は此を二大別するを得。一は形式的目的にして他は實質的目的なり。形式的目的よりすれば、児童の素質の啓發に重きを……)彼は教育學の書物を一通り見るために、小學校の圖書室から種々の本を借つて來た。

併し書物にある様に、自分の教へてゐる小供達が伸びつゝあるのかと思ふと、微苦笑を禁じ得なかつた。伸びる。伸びる。秋の天地と共にすべての軌範を脱して、小供達はぐん／＼伸びて行く、田舎の小學校だから、帽子のある者無い者、袴のあるものないもの、洋服和服、そんな雑多な様子をしてはゐたが、皆さう云ふ意識を捨て、空高く跳ねるのだつた。

若くて新らしく來た彼は、それ等の小供達から、一様に敬慕された。放課後野球のノック・バットを手にしてやるのも彼である、一緒に運動場を走つてやるのも彼である。彼は生徒等と夕方まで遊び廻つた。さうすることに依つて、時々ちぎれ雲の様に浮んで來る取り残された様な淋しさをまぎらしてゐた。

十月の末近い一日だった。放課後、明治節の日に開かれる運動會の豫定について會議があつた。村の有志達を招待する方法。父兄のこと。青年團。處女會。色んな事が決められた。

「中田先生。あなたは係りの希望は？」

「はつ。」

俊二はそれまで前に置かれた煎餅をつゞけさまに食つてゐて、他のことに無關心をつゞけてゐたので、突然自分の名を校長から呼ばれて驚いた。皆は彼の顔が余程可笑しかつたと見えて、一度にふき出した。

「運動會の係りの中のどれをやつてくれますか。」

「どれでも結構です。」

「希望はありませんか」

「大して。樂な方が良いですな。」

彼は笑ひながら云つた。

「そりやするぞ。」

「接待係におなりなさいな。」

その時さう杉山みほ子と云ふ今學期〇市の師範附屬から移つて來た女教員が云つた。

「さうでも良いです。」

俊二はぶつきらぼうに、氣乗薄氣に云つた。



「じやさう決めて置きませう。」

「接待係つてどんな事をすれば良いんですか。」

「それは後で他の人が教へて上げることにしてゐます。」

自分の事がすむと彼は又黙つて煎餅を食ひ始めた。

その日は皆晩くなつて歸途に着いた。皆と一緒に歸るのは、俊二は始めてだつた。

「私が如何うして、あなたを接待係りにおすゝめしたかお解りですか。」

杉山と一緒になつた俊二はかう聞かれて返答に窮した。

「さあ。」

「それは煎餅が食べられるからです。」

「どうして。」

「お客さん方に煎餅を出すでせう。だから接待係はこつそり食べられますわ。それに先生はお好きらしいし。今日も一人で煎餅ばかり食べておいででせう。」

「ひどいんですね、話が面白くなかつたから食べたんですよ。正々堂々と。接待係になつてこつそり食べたやうな感じがしませんよ。」

「お恐りになつたの、今のは嘘。本當は接待係は女の先生が大勢でなさるから、男の先生はじつとしてゐて良いでせう。だからおすゝめしたの。」

「さうですか。それなら有難い。」

短い秋の日が入つて終つて四邊はもう暗くなつてゐた。二人の足音が、その暗い中にぼとぼととひびいた。突然くすくすと女はふくみ笑を始めた。俊二は驚いた。

「どうしたんです。」

「でもおかしいございましたわ。」

「何がです。」

「先生の今日のびつくりなさつた顔。」

「なんですか。あれは……。」

「云ひ譯なさつても駄目です。あの時のお顔つたら……。」

なまりのない言葉でてきはき云つて終ふと大きく聲を出して笑ひはじめた。俊二も仕方なくそれに和した。

ふと杉山は笑ひを止めると、急に眞面目になつて云つた。

「先生なんか、こんな生活はつまりませんでせう。」

俊二は面喰つてしまつた。度々急變して來る相手の言詞におどろくのだつた。唱歌の時間を彼に變つて、やつてくれるのも杉山だつた。オルガンの弾けない彼に、自分の生徒が裁縫の時間だから裁縫の先生に任して、代つてくれてゐるのだつた。彼よりも一つ二つ上であらう。頭が良さうな、鋭く人の心臓を刺す様な言葉を職員會議の時に投げ出すことがあつた。俊二は良い意味で新しい型の女性だと思つてゐた。

「どうしてです。」

「でも何時も他の人と話もなさらずに、超然としておいでですもの。」

「此は生れつきです。」

「お逃げにならなくても良いじゃないですか。卑怯ですわ、はつきり云へないなんて。こんな生活がつまらないのは判りますわ。高等學校を止めていらつしたんでせう。」

ぐんぐん突き込んで来る相手の言葉に俊二はたちぐんとなつてしまつた。

「お氣に觸つたら御免なさい、でもこんな田舎で教員をしなければならいんですから。」

「あなたはどうです。あなたにも下らんでせう。」

彼女はあわてゝ否定した。

「いえ。私は女ですもの。それに始めから小學校の教員になるつもりだつたのですし。今の生活で満足ですわ。」

「満足してゐるんじゃないやなくて、満足させられてゐるんでせう。」

「どうして、誰からでせう。」

「さあ。判りません。運命からでせう。」

「まあ。先生は運命論者なんですの。」

杉山先生は驚いたらしく大きな聲で叫んだ。

「いや、さう云ふわけではありません、たゞ人間が諦める必要に迫られた時は、運命と云ふものを引つばつて來て、そ

れに全てを任せがちだと云ふんですよ。」

「先生は諦める必要がおりになつたのでせう。先生こそ満足させられていらつしやる、やはり今の生活がつまらないんですね。」

「さうでせうか。」

「さうでせうかつて、此は先生のことなんです。御自分のことなのに。」

「しかし直ぐ變つた生活に安定して行くものですね。この頃は以前程でもありません。諦めたのです。」

「いけません。諦めたりなど。男の方なんですもの、此からどんなにでも切り開けますわ。」

「さうでせうか。」

「又さうでせうかですの。ちつとも元氣がない様ですわ。」

「無くなつたんですよ。」

「でも諦めては駄目ですわ。運命なんて、氣紛れな天氣以上ですから、どちらにでも向くものですわ。おやもう、私はこちらの途ですの。おしやべりしてすみません。左様なら。」

茫然として見送る俊二の目から、女のうす水色の姿が、だん／＼暮れて行く、田の上の夕闇の中に消えて行つた。

彼の頭の中から、家に歸つても、女の斷定的な言葉が消えなかつた。

机によつて、教育原論と云ふ書物を開けて見たが（道德はむしろ人性の本来には悖るものなり。……自己犠牲は自己發展と本性上撞着するものなり。……）それ等の文字の下から耳を打つものがある。（運命はどちらにでも向く。諦めるなん

て運命を切り開くことは……。俺は本當に諦めてゐたのだらうか。いや決して。一生このまゝ朽ちるものか。それにしても杉山と云ふ若い女教師は、彼女の力強い言葉は、自分を理解してくれるかも知れない。

冬が近くなつたのか、夜が更けると、地面からしん／＼と冷めて行く様だつた。露を帯びた萩の下で虫が心細く啼いてゐる、星が冷たく何かを暗示するかの様に瞬いてゐた。

その次の日、彼は壓迫を感じながら教員室に入つて行つた。實際杉山に會ふのが何か眩しく感じて氣後れしたからだ。しかし又一方杉山と話して見たい氣がせぬでもなかつた。

不圖見ると、彼の机の上に四つに疊んだ紙片が置かれてゐた。西洋紙一杯に元氣な字が走つてゐる。

夕 ぐ れ

私はみー坊をおぶつて

畦道で遊んでゐた

お父つたんは稻を刈つてゐた

鳥が啼いて通つた

「あゝ、鳥になりてえ。」

お父つたんは空を仰いで云つた

私も鳥になりたい

鳥になつたら食べる苦勞があるまいに

「鳥のあほたれ」

お父さんは刈りはじめた。

鳥の飛んで行つた西の空は赤い

(問) 右の童謡を讀んでの感想は？

それ等の字と謎の様に、一行に一字づゝ(明)(雨)(嬉)と書いてあつた。何だか狐にだまされた様な氣がして、きつと杉山先生の仕業だらうと、彼女の方を見ると、杉山先生は平然として、机の上をあれこれと整理してゐるらしく、みじんもこんな事をした様な氣配が見えない。誰だらう、他の人にきいて見ようかと思つてゐると、始業の鐘が朝の清澄な空氣をふるはして聞えて來た。

その日は月の終ではあつたので、俊二は出席簿や教材豫定の來月のを作つて、大分晚くなつた。他の教員は歸つたと見えて、教員室の内部はかたとも音がせず静かだつた。部屋の中はもう随分暗くなつてゐた。誰も居ないと思つてゐた部屋に彼が歸りかけるとばさばさとスリッパの音がした、見ると杉山先生だつた、彼は驚かされた。どぎまぎして云つた。

「先生は未だ歸らなかつたんですか。」

「えゝ。一寸用事があつて。」

「ちつとも音がしなかつたから、誰も居ないと思つてゐたが。」

『私、うたゝねしてゐたんですよ。もう寒くなつたから、うたゝねもつらいわ。』

「では、しなかつたらどうです。」

「用事があるつて云つたじやありませんか。」

「用事があるならなほ更だ。」

二人は昨日の様に、夕暮の途を並んで歩いてゐた。俊二にはいつもからかはれてゐる様な氣がしてならなかつた。

「今朝のあれはどうでした。」

女から突然話を更へられて、面喰ふのにはもう慣れてゐた。

「あれつて何です。」

「机の上に置いてあつた紙。」

「あゝ、あれはあなただつたんですか。」

「いけません？」

「僕をテストする積ですね。」

「どうして。」

「不愉快だな。女からテストされるなんか。」

「まあ。テストする積じやありませんわ。先生にお尋ねしようと思つただけ。」

「それでもテストだ。」

「先生は随分曲つてゐるのね。あれは、村井さんの生徒で、一寸成績の良い子がゐるんですよ。お怒りになつたの。すまして。」

「いや、その子がどうしたんです。」

「村井さんが童謡を作らしたら、その子があんなことを書いたのですつて。夕暮れとか題をつけてありました。小供があんなことを書いたのですもの。村井さんが心配してゐたものだから。」

「他の人を持つて行つたら良いでせう。」

「いえ。他の人は頭が物を考へる様には出来てはゐません。それにあの人たちは、今の職を放すまい放すまいとそれ丈けに一生懸命なのだから。私は村井さんと相談して先生に御感想をお尋ねしたのですわ。」

「選ばれた光榮か。」

軽く云つたが、重大な問題に思へて仕様がなかつた。村井と云ふのは、六年の女子を受持つてゐる杉山と同年輩位の女教員だつた。

俊二も自分の受持ちの生徒の家庭がどんな状態にあるか、氣付かぬわけではない。農民の生活はどんなにみじめであるか、時々夜こつそり村を逃げて行く人々がそれを證明する。然しさうした生活の苦痛が何事にもこだはらずに伸ぶ可き兒童達の心まで、浸みこまうとは。大きな問題ではないだらうか。人間より鳥が良い。夢ではない。現實だ。鳥になつたら小作米も運ぶ必要がない。苦しい生活を迎える苦痛がない。鳥だつたら戀しい女の所へ飛んで行かうものと云ふのではない。身動きのならない世の中。

「どう思ひます。先生。」

「さあ。僕だつたら夕ぐれと云ふなら、ミレーの晩鐘を思ひ出したでせうに。」



「それは先生がローマンティストだからですわ。問題はそんな宗教畫家が描く様な余裕のあるものではありません。生活逃けるのは臆病者です。生活につき入らなければ……。」

俊二は黙つてゐた。

「私たちは余りに美しいことばかり、小供達に聞かせ過ぎると思ひます。私たちの教へる美しい話は、小供達の家の生活から随分かけはなれた、他の世界ではないか知ら。小供達が夢にも見ることの難しい世界ですわ。此のまゝで良いのでせうか。」

「どう進んだら良いか、僕には判りまん。」

「……………」

「先生にはお判りですか。」

「いゝえ私にも判りません。たゞ此のまゝではいけないと思ふだけですわ。」

「職員會議に出したらどうでせう。」

「とても駄目、こんな問題をあの人たちが眞面目に考へると思つて。」

「さうでせうか。」

「私が用事と云つたのは此の事だつたの。」

秋の日は寒い。彼等二人の影がうすく地面に延びてゐた。

「それから（明）（雨）（嬉）の三字解りました？」

彼も今それを云はうと思つてゐたのだが余り大きな動搖を胸の中に與へられてその機會を失つて終つてゐたのだつた。

「問題が難しくて判りませんでした。勝手に作つて讀んだのですが、（明日雨が降ると嬉しい）つて讀むのじやありませんか。」

彼女は小供の様に聲を立てゝ笑ふと、意地悪さうな顔をして見せた。

「えゝ、合つてゐるわ、でも少し違つた。明日降つちや何もなりはしない。私は明治節のつもりだつたの。」

「明治節に雨が降つたら、どうして嬉しいんです。」

「だつて運動會が雨天順延でせう。休みが一日出来るから。」

「なんだ。そんなことか。」

「もし明治節の日、雨が降つたら先生のお宅へうかゞつても良いか知ら。」

「えゝどうぞ。御馳走はしませんよ。」

「私は先生とお話してゐれば良いんです。」

「あなたと話すといつても僕が受身だ。」

「私がおしやべりだから。」

「いやそんなつもりじやありません。それよりも、どうしてあんな謎の様なことを書いたのです。」

「さあ。それは——判りません。」

「自分でして自分が判らない。あなたらしくもない。」

「どうして。」

「あなたは何でもきちん／＼と的確な理由をつける理論家でせう。」

「私そんなかしら。」

「……………」

「でも私だつて、ふと理由もなく、して見なくなることもありますわ。」

彼は家に歸つて思つた。未知の世界に入つた警戒する様な態度が、この頃は段々削ぎとられて行く様な氣がした。新しい重大な興味のある問題が起つて來るのだつた。くだらぬと思つた生活から、新しい事を日目に教へられて行つた。それと共に次第に以前の高校生活と別れる時に消えてゐた情熱が、再び戻つて來るのを感じた。

(明)(雨)(嬉)。アンナ、カレニナか何かの中に、戀人同志が言葉の頭文字だけを並べて、云はんとする所を理解し合つたことが、書かれてゐたのを思ひ出した。まさかそれを意識して、書いたのではあるまいが。

母子二人の淋しい生活の中にも、以前より、しば／＼多く、朗かに笑ふ彼の姿を、母はどんなに嬉しくいとしく思つたらう。

十一月三日は朝から雨だつた。

外では一雨ごとに冷たさを増し、冬の近づくの知らせる細い雨が、靜かに降つてゐた。冷たい情熱が息をひそめてゐる様な天地。庭の八手の大きい葉が、雨に風が交る度にざわざわと音を立てた。小鳥の群も塙を出ることの出來ない日。

山も田も畑もうすぎぬを通して見た姿に沈んでゐる。生きてゐるのを自覺せねばならない。雨に濡れて永遠と、人生とを知るが良い。意志の力は、時に人を主權者に見せ、時に奴隸にして終ふ。意志の力はあやしい魔の灯。理性と情熱との強い争鬭に伴ふ苦悶を幾分廣い額に漂はせて、落付きを見せる紫色の着物の女は、昨日の彼女とは思はれぬ。額と口もとが無盡藏の意志の力、理性をひらめかしてゐるなら、その黒い眸は無限の情熱に燃えてゐる。矛盾の苦痛を負ふ女。

「大學は何科にお出でになるお積りでした？」

「……………」

「失禮でしたか知ら。」

「いや、文科に進むつもりでした。」

創作で立たうと思つたのです。若さから来る無鐵砲だつたかも知れません。今から考へると、ぞつとする事もあります。併しそれが一番自分に従つたことだつたのです。」

「今は？」

「今ですか。今は此の通り田舎教師じゃありませんか。」

故意と作つた不自然な笑が俊二の頬を醜く歪めた。

「田舎教師つてくだらないでせう。」

「あなたもさうですか。」

「いゝえ。私は自分から田舎を希望して参りましたの。」

「都會に何故そのまゝおいでにならなかつたのです。」

「都會は全てに刺戟が強すぎますわ。靜に自分を知ること、世の中を知ること、出來なかつたものですから。」

「都會を避けたがる時は、その人が老境に入つた事を知らせるものと、誰かゞ云つてゐましたよ。」

「老境ですつて。可哀さうに、私もお婆さんになつたのか知ら。でも私は都會を逃げたからつて、——偉さうなことを云ふ様ですけど、——生活まで回避したわけではありませんわ。もつと生活の深刻さを味はふために田舎を希望したのです。」

「味はへましたか。」

「豫期してゐた以上ですわ。皆どん底の生活をしてゐるやうに思へます。それが都會の様に上から被せて、表面丈けでもごまかすものがあると、さうでもありますまいが。」

「僕も實際小供達の生活に驚いてゐるのです。僕等も考へなければなりませんね。今からはごまかしは止めにして、生きることを教へませう、夢では駄目です。現實です、問題は。」

きつぱり云ひ切つた俊二の顔を眞正面からじつと見てゐたみほ子は面を伏せると云つた。

「やはり女は駄目ですね。」

「どうして。」

「現實を見ようと努めながらも、夢に牽かれがちですもの。」

「どんな夢に。」

彼女はきつと、面を上げて眼を輝かせたが、すぐ下を向いて細い聲で、ほつと息を出すのと一緒に云つた。

「それを云へとおつしやるの。」

「どうしてです。」

「女は弱い者ですわ。」

蕭條たる霧の如き雨の中に、夕闇が淡く溶け入つて、障子の中は電燈が冷く點されてゐる。

杉山みほ子が歸つて行つた後、俊二は靜に考へて見た。一定の理想の指針を失つた不安定な社會の動搖を敏感に感じ、それに雄々しく處して行かうとする力強い女性が一面には、千古から女性の内部に流れて來た情熱がকাশ出す夢の中にさまよふことを憬がれてゐるとは。「神を祈つて麴麴が得られるなら神を祈りもしませうが、宗教で人生を回避する方法は私には取れません。人生つて若痛ですわ」と云つて見せた鋭い理智の彼女が。女は弱いと嘆く彼の女。情熱だと云ふ。夢を追ふとは、如何なる夢。幻に畫く天國は、如何なる蜃氣樓か。

何とも形容の出来ない空虚な淋しさに包まれて、俊二は灯の淡い中に何時までも横たはつてゐた。

南國とは云へ、稻が刈られた田の切株に霜が白く降りて、霧の中から覗き始めた太陽に輝く初冬が來た。野も山も畑も黒ずんだ寂寥の中に取り残されて終つた。

夏の旱魃が長く續いたために今年ほどの田も收穫が減少してゐた。灰色の雲を次第に増して行く無心の空をちつと仰いでゐたがほつと溜息を吐き出すと共に、鍬を手から投げ出してどつかと黒い冷たい土の塊の上に腰を据ゑた農夫の姿が、

あちらこちらの田畑に見られた。冷たい木枯が、北から南へ、西から東へ、赤子の泣き聲の様な唸りをあげて地上のすべてを裸にして終はうと荒れるのだつた。

農夫たちは、自然の氣まぐれから、豊かな收穫を與へなかつた土に對して、依然祖先から彼等の内部に育くまれて來た土への愛着を捨て、終ふことは不可能だつた。もし土が彼等に豊富な收穫を與へても、彼等の生活にどれ程の裕さを増さう。土を恨む可きであらうか。人間の生活は、人間同志で解決するが良い、土にこれ以上の物を求めるのは不可能だ。

滲めな人々の運命を暗示する様な暗い日が續いて、十二月に入つて行つた。高等學校で華かな夢に酔つて來た俊二には過去の生活とは余りに差のある現在の周圍を眺めては、大きな何物かを避けることは出来なかつた。かう云ふ生活を思つたことが、かつて一度でもあつただらうか。教室の窓から覗いた空は朗かで明るかつた。彼が習得した學理が一粒の米ですら作れないと云ふことを知つた。

人間は何を所有してゐるのだらう。不滅の愛だと云ふ。友情だと云ふ。若し彼等が双方共に食へなくなつた時、彼等の前に一片の麵麴を投げて見たら。人に脅かされ、自然に脅かされ、夢に所有してゐたものを、終には大きな手に奪ひ取られ、只一つの肉體を死の底に連れ込まれて行く人生。不安の一生を、苦痛とともに持ち去る死の姿。

生活の脅威に堪へ切れず、村をこつそり逃げて行く人が増して行つた。俊二の級の中にも一人大勢の兄弟と共に、父母に従つて村を逃げた小供が出た。それ等の逃げて行つた農夫達は決して、現在より良い生活を營ましてくれる土地のある事を信じて村を去るのではない、只一時丈け現在の状態から逃れることが出来ればそれで良かったのだ。

俊二は霜柱をさく／＼と音を立て、崩しながら學校に出た朝、駐在所から町の警察に送られてゐる女に出會つた。寒

さうなぼろ／＼の木綿の着物をつけ、余り年でもなさうなのに、青い顔色で、ひどく營養不良らしくとぼとぼと巡査に連れられて途を進んでゐた。學校で他の教員達に訊ねると、「何、墮胎でせう」と何氣なく軽く云はれた。

俊二は一日中此の女のことを考へて見た。併し「何、墮胎でせう。」と簡単に云つて終ふことが出来なかつた。惡魔の巢窟の様な女の姿だつた。

又かうした不安と疑問と共に、俊二の意識の中に、杉山みほ子の事が擴がつて來た。彼女と會へ、彼女と話すことの出来る學校は楽しく思はれた。鋭い理性で田園の貧しい人々の生活を解剖して行く女だつた。俊二はみほ子から新しい事を毎日教らへれ、又今まで氣付かずにゐた事柄を指示される様に思つた。

俊二は思ふのだつた。彼女に對する親しい感情は、戀ではない。愛ではない。一人の同情者、一人の指導者としてだ。決して戀してゐるのではない。さう強いて思つて見ると、その後から、わけの判らぬ淋しさが湧いて來るのだつた。冬は益々寒さを加へて行く。

西に走る連丘にはもう白く雪がかぶさり、灰色の雲が、地の上に低くたれてゐた。時としては木枯しが破屋のトタンを剥ぎ取つて、ひようと唸ることもあつた、地には人影がなくなり、暗い農夫の家々は戸を閉ざして、一家の人々がふるへながら、いろいろを圍んで、沈みきつた顔をしてゐた。黒い土はこの荒涼たる中に、生への執著にびく／＼とうごめいてゐる様だつた。

冬休みが來た。

代用教員と云ふ斯しい生活を始めて以來、豫期してゐたより以上の影響を受けた日々を、靜に俊二は顧みた。決してそ



の生活は無駄な失望に充ちたものではなかつた。

それと共に、農夫の生活から受けた感銘を、創作して、高等學校時代、彼等のグループによつて作られてゐた同人雜誌に送らうと思つた。

黒い生命のある様な土から生れ出て、土に愛せられ、土に苦しめられ、小作人としてみじめな生活に追はれながらも、その生れた土地に執著を覚え、去ることも出来ずに、樂しみの無い一生を終り、枯木の様に朽ち果て、再び土の中に歸つて行く農民の生涯を、出来るだけ鋭く表現しようと努めたのだつた。生活の脅威の下に行はれる朴訥な罪惡の數々を、力強く紙の上に投げ出して、解決を與へることの出来ないまゝの六十枚程のものだつた。

原稿を送つてから十日程して前田から手紙が來た。彼の創作に對する皆の批評だつた。それ等は決して俊二に好意的な文字ではなかつた。むしろ嘲笑的な文字に充ちてゐた。最後に同人雜誌に載せるためにも一つ他の作品を送れと云つて來てゐた。

彼は直ちにそれに對して反抗的な返事を書いた。(君等は皆云ふ。深刻ぶるなと。深刻ぶるのではない、事實人生は深刻なのだ。俺は苦痛から避ける様な朗かなと云はれるごまかしのコントには満足出来ないのだ。深刻小説は今のせち辛い世の中に歓迎されるものでないと君達は云ふ。自分の書いた物が深刻小説と名づけられる物であるかどうかは知らない。併し俺はかう思ふ。創作は——藝術はと云つても良い——人間性の中にあつて、人間性に従ふものでなく、むしろ人間性を導くものだ。藝術は人間の生活を回避するものであつてはならない。生活をそのまゝたゞき出せば良いのだ。従つて生活が苦痛と矛盾とに充ちてゐて、解決出来ない時は、創作も苦痛と矛盾を投げ出して、朗かな解決を與へられてゐないまゝ、

で良いのではないだろうか、俺は此のまゝ進まうと思ふ………。

昔の友人達から離れて孤獨になつたが、今では反つて全てを清算しつくした氣がして、彼等より一步進んでゐると云ふ満足を感じた。

みほ子は休み中も家に歸らず田舎の叔母の家に残つてしばしば俊二を訪ねて來た。俊二は兒童教育について、又兒童の心理について彼女から有益な知識を受けた。

新しい學期が始まつてもう二週間近く過ぎた。村は舊曆の正月が近くなつたので、あれやこれやと忙しさうに見えた。雪のひどく降つた日だつた。その日は俊二はみほ子と一緒に學校を出た。

「私、今困つた事が出来てゐますの。」

みほ子は心から困つたと云ふ様子であつた。

「どうしたのです。」

「今日退學届が出てゐるんです。私の級の稲本はつと云ふ生徒。聞いて見ると、何でも子守か何かにやられるらしいの。佐々木つて人に借りたお金が返せないから町に子守にやつてその前金で、借りたお金を拂ふとかつて、後四十日もすれば高等二年を卒業出来るものなんですもの。」

「その金の期限は何時ですか。」

「舊の大晦日までなんですつて。」

「待つてやれないんでせうか。」

「随分頼んで見たらしいけど。」

「校長さんに行つて貰つたらどうでせう。」

「校長さんは退學するならしるゝでもおつしやるでせうよ。」

「そんな事はないでせう。」

「でも佐々木つて云ふ人は縣會議員ですし。」

佐々木と云ふのはその村の大部分の山や田の所有者で、縣會議員だつた。

年末になると、そこでもこゝでも借金に苦しられてゐる悲痛な影が見られた。僅かの金で後四十日で卒業する小供を、子守等にやつて終はねばならないとは。然しこれに似た事はそんなに稀な事ではないのだ。

その夜俊二は一寸そこまゝと母に告げて、寒い雪の積つた外に出た。異常に神経がたかぶつて來て、耳もとを吹く冷たい刺す様な風が、反つて心地良く感ぜられた。途は不知不識の中に進んで、踏む足も次第に力を増して行つた。白い壁の塀がすぐ見えた。大きな家だつた。沸ぎる感情を壓へながら一步を中に入れねばならない。

「三月まで待つてやれないでせうか。」

「いや期限は舊の晦日までだからな。」

「しかし子供が……。」

「君は小供小供と云はれるが、此方はその娘の事と關係があるのではなく、只金を持つて來てくれゝば良いんだ。」

「小供が學校を卒業するまで待つてやれない理由はないでせう。」

「又小供と云ふが、こちらじや小供のことなんかどうでも良いんだ。向ふが自分の子供をどうしようと思つたことじやない。小供々々と云はれるのは迷惑だ。」

佐々木は傲然と云ひ放つと横を向いて云ひ加へた。

「それに癖になるからな。」

「しかし四十日おくれたつて、あなたの方にや大した影響はないでせう。」

「それが癖になるんだよ。百姓共は直ぐあまえて来るからな。君は未だ若いよ。世の中つてものはそんなものじゃない。もう少し年でも取ると、君にも判るだらうが。はつはつはゝゝゝ。」

變に口を歪めて、角火鉢の向ふで笑ふと、煙管に火をつけるために、頭を下げて火鉢の方へ持つて來た。今は俊二の感情は氷の様に凝結して終つて不思議な程冷靜を保てた。今若しこの頭、この脂肪にぎら／＼してゐる大きな首を斧か金槌の様な物で、たゞきつけたら、その一打で何もかも解決して終ふのかも知れない。脂肪の固まりが飛び出て、肥えた男が足下に倒れて終つて……。惡魔が耳もとで何かそゝのかす様に感じた。俊二は心の中で首を横に振りながら言つた。

「どうしても待つてやれないでせうか。」

「何度も云つた通りだ。」

俊二は体中の血が頭蓋骨の中に皆上つて來る様に感じて、手がぶる／＼とふるへた。冷靜な感情がまた湧き上つて來た。相手もそれを感じたらし／＼、一寸態度を變へたが、それを壓へると變に靜かな聲で云つた。

「君歸つたらどうだ。さう云ふ脅迫じみた事を云ふ權利はないじやないか。」

又横を向くと小さく云ひ加へた。

「若すぎる。」

俊二はかつとなつた。眼の先に眞赤なほのほが燃えてゐる様に思へた。

「ようございます。もう頼みますまい。」

俊二は何も彼も判らなくなつた。

「何をする。暴力沙汰とは……………」

廊下を走つて来る足音が聞えた。耳もとでがんぐ音がした。電燈が大きく揺れて消えて終つた。

次の瞬間、俊二は冷たい雪の上に投げ出されてゐた。泣くにも泣けない氣持だつた。涙がぼろ／＼と頬を傳つた。雪の上に倒れて死んで終ひたい氣にもなつた。空の向ふに大聲で呼びたい氣にもなつた。から／＼と笑つてやりたい氣にもなつた。いろんな感情が渦まいて、頭の中が／＼した。それからどれ位時間が経つたらう。

かた／＼と凍りついた土の上を走つて来る音がした。が俊二はどうにでもなれと思つて、身構へもしなかつた。人影は俊二の前で立止ると、はつとすくんで、急に走り寄つた。

「やはりさうだつた。私はあなたのお宅へ行きました。お出かけだと云はれるので、きつと此處だと思つて、有難う、

有難う。ほんとに。」

みほ子だつた。呼吸がけはしく吐く息が白かつた。俊二は口許に微笑が湧いて来るのをどうすることも出来なかつた。苦

い苦い笑だつた。地面から立上ると絶望して了つた人の様に言つた。誰に言ふともなく。

「正しくしても駄目だ、強くなくては。」

「正しくさへあれば……」とは、一生を弱い者で送らなければならない人達の卑怯な負け惜しみだ。強くなくては。強くなくては。

右の手には佐々木の頭をなぐりつけた跡がじん／＼した。馬鹿々々、さう云ひかゝつたが聲が咽喉から出なかつた。不意にみほ子は俊二の手をしつかり握ると言つた。

「弱い者には何も無いとおつしやるの、何もないでせうか。本當に何も出来ないでせうか。」

熱情に燃えた眼で俊二の顔をじつと見つめて、續けて低い聲で言つた。

「夢でせうか、私の。いゝえ、女の夢でせうか。弱い者には愛することも。」

「いゝえ、弱い者を強くすることは出来ないでせうか。」

みほ子は低くはあつたが、力強くそれだけを言ひ放つと咽び泣き始めた。

「何、何ですつて。」

俊二は意外に思つたが、それだけ云ふと二人は黙つて立つてゐた。

「みほ子さん。泣くのは止めなさい。さあ行きませう。」

「えゝ、もう決して泣きません。それより痛みはしません。」

「なに平氣です。」

彼等二人は寒い冬の夜の中にしつかり大地をふみしめた。凍つた途。  
 彼等の前に北斗星が斜に走つてゐた。

身を切る様な風がごうつと耳のあたりを通ると、それ等の星群がふるふる様に見えた。

(長編の一部として)

八・七・二六